

震災と教育

被災地での教育支援の現在・過去・未来

特定非営利活動法人キッズドア

理事長

わたなべ ゆみこ
渡辺 由美子



1964年生まれ、千葉大学卒業。大手百貨店、出版社を経てフリーのマーケティングプランナーとして活動。夫の仕事の関係で1年間家族で渡英。帰国後NPO法人キッズドアを設立。子供の貧困対策に関する有識者会議構成員。

はじめに

NPO法人キッズドアは、「すべての子どもが夢や希望を持てる社会の実現」をミッションとし2007年に設立しました。当時は、子どもの支援といえば「海外の後進国の支援」であり、一億総中流の残像が残るなか、日本国内に貧困に苦しむような子どもがいるという認識が乏しく、政府も社会全般も「子どもの貧困」という課題の存在すら知らないような状況でしたが、その後景気後退と格差の拡大が社会問題となるなかで、ようやく困難な環境で暮らす子どもたちへの支援の体制が整ってきました。キッズドアでは経済的に困難な状況にある小学生から高校生を対象に、学生や社会人のボランティアが無料で学習支援を行うことで、貧困の連鎖に陥ることを予防する活動を行っています。

東日本大震災での支援開始の経緯

2011年3月11日の東日本大震災の発災後、私たちは4月から宮城県に入り、子どもたちの支援を始めました。実は前年に東京で始めた無料学習会がようやく軌道に乗り始め

たばかりで、まだまだ団体の規模も小さく、とても被災地に向けるような状況ではなかったのですが、震災ですべてのものを失っていく子どもたちを見て、いても立ってもいられず活動を開始しました。ご縁があり、宮城県南三陸町の避難所で子どもたちのために「あおぞら学校」を行ったのが最初の活動であり、南三陸町では現在も活動を継続しています。その後、仙台市内に簡易の事務所を置き、被災直後は、宮城県、福島県、岩手県の避難所等で子どもたちに勉強会を行いました。また東京に避難してきた子どもたちのために避難所となった通称「赤プリ」（グランドプリンスホテル赤坂・当時）内で毎日学習支援を行い、そこで知り合ったご家族とは今も連絡をとりあっています。

家も仕事もなく今後の見通しが一切立たない状況で、「勉強を教える」ニーズがあるのかと思う方もいらっしやるかもしれませんが、こんなときだからこそ「勉強に遅れが出ないように」と心配される親御さんはひじょうに多かったです。また子どもたちにとっても「学ぶ」という日常を取り戻すことで、ほん

の少し落ち着くことができたようです。また、どんなに被災をしても受験はありますから、受験勉強のサポートをすることで、受験生の精神的な支えとなった側面もありました。

5年間の教育支援活動

私たちの活動は大きく分けると、①福島県、②宮城県南三陸町、③宮城県仙台市の3地域での支援から成り立っています。ここでは特に、宮城県仙台市について詳しくご紹介します。福島県の子どもたちへの支援では、いわき市内の仮設住宅近くに設けられた公共スペースや、仮設住宅の学校で放課後や夜に子どもたちを集めて学習会を行いました。

宮城県南三陸町は、甚大な津波被害があったところです。私たちは津波により校舎が使えなくなった戸倉小学校、戸倉中学校の支援を2011年5月から現在まで続けています。小学校では「放課後見守り」を毎日、中学校では3年生の放課後補習に週2〜3日学習指導員を派遣してきました。

宮城県仙台市では、2011年より仙台市内から広く集めた生活困窮家庭の中学3年生



中学3年生を対象にした学習会の様子

を対象にした無料高校受験対策講座と、高校生を対象とした無料学習会を行っています。仙台市内は沿岸部ほど直接的な被害はありませんが、震災により勤務先が倒産、パートの時間が激減するなど、間接的な被害を受けた家庭が数多くあります。特に、ひとり親家庭など震災前から厳しい状況にあったご家庭が、震災によりますます厳しくなっています。

当初は、週1回日曜日のみの活動でしたが、2013年に仙台市内で教室スペースのある事務所を設けたのをきっかけに、平日の夕方も自習室として開放し、おもに、大学生ボランティアによる学習支援を行っています。現在は月水金を中学生、火木を高校生の自習室として運営しています。この他、2014年度までは緊急スクールカウンセラー等派遣事業として仙台市の沿岸部の学校にTA*を派遣するなどの活動も行っていました。

一見では、学習会に通っている子どもたちは、どこにでもいる普通の子どもと同じです。勉強を一生懸命する子どもいれば、つい遊んでしまう子ども、おしゃべりばかりしている子どもいます。しかし、その裏には深刻な事情を抱えた生徒も少なくあり

ません。学習会に通っている生徒の保護者で亡くなってしまった方が既に3名もいらっしゃいます。震災で安定した生活基盤を失い、子どものため、家族のために働きすぎてしまったご様子を伺うと胸が潰れる思いです。「母が亡くなったので今日の学習会は欠席します」というようなメールをこれ以上生徒からもらうことのないように、と祈るばかりです。

お兄さん、お姉さんとしてそのような子どもたちに寄り添っているのが大学生ボランティアです。大学生は、毎週日曜日朝9時に集合して会場準備や生徒の受付を開始し、10時からお昼をはさんで15時まで生徒のレベル別に講義形式の授業や、個別指導を行います。その後も宿題をやつてこない生徒に居残り勉強をさせ、生徒が帰った後は反省会や片付けを行うので19時を過ぎてしまうことも珍しくありません。お昼ご飯の時間もなるべく生徒と話しをして、大学見学や初詣なども企画し「楽しい学習会」をつくり上げてくれていきます。前期試験で志望校が不合格だった生徒を励ましながら指導を続け、後期試験で第一志望校合格を勝ち取ったり、なかなか成績が上がらず「公立高校は無理なのでは」という生徒が、「奇跡の合格」を果たすことができたのも彼ら彼女らのおかげです。生徒たちが高校生になっても自習室に来て、学校や家庭の愚痴や心配事を相談しにくるもの、学生ボランティアとの絆の強さがあるからなのです。

これからの被災地での教育支援

2015年は「震災の風化」を強く感じた1年でした。しかし被災地ではいまだ復興への道のりは遠く、傷みの激しい仮設で5年目を迎える方も数多くいらっしゃいます。被災地からの人口流出は継続しており、子どもの数がどんどん減っている地区も少なくありません。今まで頑張ってきた大人たちにも心身の疲労が蓄積し、子どもとともに保護者をどう支えるかということも重要です。

当時中学生や小学校高学年だった子どもたちは、高校を卒業し地元で働く子どももいれば、進学や就職で離れていく子どももいます。一方、今の中学生は、震災当時はまだまだ幼く、「自分たちが復興を支える」という意識が育ちづらいと感じています。昨年まではたくさんあった海外交流などの民間の「復興人材育成プログラム」は激減しており、そのようなことも子どもたちの「学ぶ意欲」に影響をしていると感じます。復興住宅が整い、道路や町並みが完成しても、そこで生活できる基盤をつくるためには、これから長い年月がかかります。特に復興特需が消えた後で雇用をどうするのか、衰退する地方を食い止め未来をつくるためにどうするのか、難しい課題を解決するためには、地元の子どもたちに力をつけてもらうことが最も重要です。私たちも、国や行政、そして企業などの民間の方々々と協力し、今後も引き続き被災地での活動を継続できるように努力して参ります。

* TA = Teaching Assistant